

二〇二六年度 人文学部 日本・東アジア文化学科
外国人学生特別入学試験

試験 日 … 二〇二五年 十月十二日 (日)

試験時間 … 一〇時〇〇分～一二時二〇分(八〇分)

【小 論 文】

問、「かたまりとしての思考」と題された次の文章を読んで、後の問に答えよ。

絵を鑑賞するのに大切なのは、なにかを学ぼうとしないことです。現代では美術は教育の(ア)イツカンとして国の管理下に置かれています。だから、小学校のころから私たちは絵を学校の授業で習い、見方を教わります。でも、少し考えてみればわかりますが、これはちよつとおかしな考えです。

絵というのは、どこかの誰かが自分を筆やペンを使ってあらわした、いわばその分身です。同じ絵を描ける人は、世界中探してもどこにもいません。この意味では、絵は(イ)ユイイツ無二なのです。

ところが、学校の教育はユイイツ無二のはずの絵を評価して(あ)優劣をつけ、よしとされる模範にできるだけ近づけようとします。最近ではそういうのを嫌って、自分を(ウ)スナオに出すのがよい絵だと教える流れもあるようですが、決められた枠のなかでのことに変わりはありません。

でも、もしも絵が誰かの分身であるなら、それに優劣をつけることなどできっこありません。自分をスナオに出すのがよい絵だといっても、そもそも、最初からよい絵もわるい絵もないのです。人によい人や悪い人がいるのは事実でも、そのひとの存在そのものがよかつたりわるかつたりすることは絶対にありません。

ちよつと話が大きさに聞こえるかもしれませんが、でも、(一)絵が学ぶものではなく、それを描いた人の分身であるならば、絵によいも悪いもないのです。目の前にある絵は、「いまそこにある」としか言いようがない。「なんだ、この絵はヘタクソだから意味がないな」とか、「この絵は〇〇風だからモノマネでしかないよ」とか切り捨てず、私たちは、その絵がいま疑いようもなく自分の目の前にあり、それを(A)否定することは絶対にできない、というところから出発しなければなりません。こういう次元では、先生が都合よく指導したり、生徒が一生(エ)ケンメイ学んだりできるようなことは、実はいつさいないのです。

では、どうすればよいのでしょうか。絵をまるごと受けとめることです。ひたすら感じ取ることです。でも、それはみがかれた感性を(い)駆使するようなことではありません。どちらかといえば、なにを考えないというのが近いと思います。でも、無の(う)境地で絵に接するということのとも違います。そんなのではわけがわからない、と、ここらで文句のひとつやふたつも出てきそうなので、もう少し詳しくお話ししてみましょう。

まず、(X)人はなにも考えないということではできません。考えていないようでも、いろんな記憶や印象や思いや感情がゴチャマゼになって、決して(え)筋道立ってなどいえないでしょうが、なにかを考えてはいるのです。

ものを考えると、読書のように、決められた行ごとに文字を右から左へと追っていくものではあ

りません。また、原稿用紙のマス目を一つひとつきれいに埋めていくようなものでもありません。だいいち、頭のなかには頁もマス目もありません。もっと渾然一体としています。それを誰かに伝えなければいけないときは、私たちは、それを本の頁や原稿用紙のマス目に沿って(お)絞り出すように、なんとかきれいに整えて「出力」していきます。そうでなければ、ほかの誰かは、あなたの考えを知ることができません。

そうすることで、頭のなか整理されたり、自分で思ってもいなかったような(B)発想が浮かんでくることもあるでしょう。それこそが、書くことの恵みです。だから、ときどき私たちは、そうして出力されたものが、最初から頭のなかにあつたかのように(オ)カンチガイをさせていただきます。でも、当然のことながら、頭のなか最初からそうなっていたわけではありません。逆に、書いたり読んだり反芻したりすることで、渾然一体としていた思いや感情や印象や考えの矛盾の「かたまり」のような豊かさが選別され、角を落とされ、成形されてしまうことも当然あります。これはある意味、とても惜しいことです。

なぜなら、そういう腑分けされていない「かたまり」のような状態も、立派な「思考」だからです。そして、創造的な飛躍やひらめき、天から降ってきたようなアイデアというのは、こうした「かたまり」の思考がふつふつと化学反応のようなことを起こして、自分でもわからないまま、その「すきま」からひよいと飛び出してきたものなのです。

ここで絵に話を戻します。絵というのは、実はこの(2)「かたまり」としての思考に近い状態です。絵を描く人は、いろんなことを考え、感じ、思いながら絵を仕上げていきます。もちろん、その過程で時間は過去から現在、未来へと流れていきます。でも、完成した絵は、そうした時間をひとつの面のうえに圧縮した状態です。いわば過程が集積した「状態」です。だから、そういう「かたまり」としての絵を見るとときには、私たちもまたそれを「かたまり」として受け取る必要があるのです。

(榎木 野衣(さわらぎのい)『感性は感動しない』による)

問一 傍線(あ)く(お)の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 傍線(ア)く(オ)のカタカナを漢字に直せ。

問三 傍線(A)・(B)の語を英語に訳せ。

問四 傍線(X)の日本語を、英文に訳せ。

問五 傍線(1)「絵が学ぶものではなく、それを描いた人の分身であるならば、絵によいも悪いもないのです」とあるが、なぜか。その理由を一〇〇字前後で説明せよ。

問六 傍線(2)「かたまり」としての思考」とあるが、あなた自身のこうした「思考」の具体例を挙げた上で、これについて考えるところを、本文全体の趣旨を踏まえつつ、四五〇〜五〇〇字で述べよ。